

平成二十六年 度

中学一般入試① 考査問題 (国語)

注 意 書 き

- ・考査監督かんとうくの合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから一六ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくい場合は、手を挙げて考査監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、考査監督の指示があるまでは席を立たないこと。

「、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。」

早坂真歩は、小学六年生の男の子。二年生の時に父親を亡くし、その日伯父からもらったカメラをいつも持ち歩いている。ある日、ろくに話したこともなかった転校生ハヤシの強引な誘いで文集委員を引き受けることになり、二人で文集用の写真を撮る。翌日、写真の現像を頼みに行った店の店員で、カメラマンの仕事もしている大和に、真歩は一緒に海で写真を撮ろうと誘われ、ハヤシと大和と三人で海に行った。

ハヤシはブルバックからぐちゃぐちゃの水着を取り出した。「早坂くんも！」と言ったが、真歩は断った。砂にまみれながら、まだ濡れている水着を振りまわすハヤシに、大和は楽しそうにカメラを向けている。

「ホワイトバランスいじったりして撮ったことある？」

「花とかをアップで撮るときは露出補正っていうのをやってみなよ、花びらが硝子細工みたいに繊細に写るから」

「三分割法ってわかるか？ グリッド線を頭の中で引いて、その線を基準に写真の構図を考えることなんだけど……小学生には難しいかな」

1 写真の話になると、大和は早口になった。そして大和が早口になっていくたび、真歩もずいずい身を乗り出しその話を聞いた。知っていること、知らないこと、知りたかったこと、真歩はうんうんと頷きながら大和の話を聞いた。写真にはきつと何の興味もないはずのハヤシも、真歩の隣でうんうんと楽しそうに頷いている。

「一人で撮るよりも、二人で撮る方が楽しいな、やっぱり」

大和はそう言うとおもちゃを与えられた赤ん坊のようにカメラを抱え、たくさんのシャッターを切った。真歩もそれに続く。一秒ずつ色を変えていく海は最高の被写体のようだ。途中からハヤシがモデルになって、撮影大会のようにもなった。「ほらー！」「へーいー！」とハヤシはノリノリで、大和は爆笑しながら砂浜を転がるみたいにしてシャッターを切っている。

ハヤシはもとそんなものを抱いていなかったかもしれないけれど、真歩もハヤシも、日が暮れるころには大和に対する警戒心はすっかりなくなったようだ。

夕陽が海の中に落ちて完全に溶けてしまうと、波はきちょうめんな画家の絵筆のように砂浜の上を行ったり来たりした。

はだしになって三人でそこを歩いていると、不意に大和が口を開いた。

「お前たち、何で仲良くなったんだ？」

「え？」

「いや、全然違うタイプだからさ。まあ小学生のころなんてそんなもんか」

「……別に仲がいいわけじゃないけど」真歩は自分の親指のつめに乗っている小さな砂を見ながら言った。

「急にコイツに話しかけられて、文集委員のカメラ係にさせられて」

「おりゃー！」ハヤシは足の指で器用につまんだ砂を真歩にかけようとする。

「やめろって！」

「おりゃおりゃ」

「やーめーろっ、カメラにかかるだろ」

「だって、早坂くん教室で笑わないんだもん。楽しくなさそうなんだもん。だから声かけたんだよ」

「ハヤシはいつも笑ってそうだもん、どこでも」大和が自分の足元にレンズを向けた。カシャ。続いて、シャッターを切る音が一つ。

「早坂くん、もっと笑えばいいのに。笑ってれば楽しくなるよ」

笑ってれば楽しくなるよ。

カシャ、と、シャッターを切る音がまた一つ。そのたび、真歩の顔は下を向いていく。言葉を海の底に落とすように、真歩は下を向いたまま口を開いた。

「だって」

「だって？ 大和がちやかすように繰り返す。」

「だって、笑ってたら、また、悲しい別れがくるんだ」

かなしいわかれ？ 外国の言葉をなぞるように、ハヤシが言った。大和はレンズから目を離れた。両手でカメラを握ったまま、その場に立ち止まってしまった真歩の顔を見ている。

「……毎日笑って過ごしてたら、また、お父さんに会えるって言われたんだ」

「だったらそれこそ、笑ってれば」

「ダメなんだ」

大和を遮るようになんと言った途端、喉の奥から声が駆け上ってくるように真歩は言った。

「また会えるってことは、また、別れがくるってことだから」

真歩は足元を見つめたまま、体を震わせている。

もう一度会えるということとは、もう一度別れがくるということ。真歩の両足がゆっくりと、あたたかくてやわらかな砂の中に埋もれていく。

3 「あんなふうに、家族皆が泣いている姿、僕、もう二度と見たくない」

真歩の言葉をさらっていくように、静かな波が三人の足首の骨のあたりを撫でていった。大和はもうシャッターを切らない。ハヤシはもう砂を飛ばさない。二人とも何も見えないかのように、ゆっくり、ゆっくり歩いている。

「……絶対に、真歩のことを追い抜かせない。真歩の表情は誰にも見られていない。」

「だから、笑わなかったの？ 学校でも、楽しそうにできなかったの？」

ハヤシの言葉に、真歩は小さく頷いた。伝えなければいけない大切な言葉を落としてしまわないようにしているみたいだった。

「……じゃあ、写真が好きになったのは？ どうしてだ？」

黙ってしまった真歩に笑いかけるようにして、大和が言う。楽しい空気になると思ってそう訊いたのだろう。

「写ってるかもしれないから」

かすかな声が、足の甲の上を滑り落ちていく砂のようにこぼれた。

「黒いリボンがかかった写真の中で、お父さん笑って……伯父さん、写真の中でなら、お父さんは生きてるって言ったから」

海の水は、人の肌のようにあたたかい。誰かののひらが、足の甲を撫でてくれているみたいだ。

「いろんな場所で写真を撮ってれば、どこかに写ってるかもしれないから……その写真をずっと持てれば、もう、あんなふうに離れ離れになることもないって思ってる」

真歩の声も、瞳も、表面張力でぎりぎりの状態を保っている。

「写真しか、すがりつくものがなかったんだな」

大和が、真歩の頭の上に手を置いた。

「辛かったな」

真歩の右目から一粒、涙が真下に落ちた。

「お父さん」

5 その声はまるで、感情の産声のようだった。

「何でいなくなったの、どこ行っちゃったの、家族皆を泣かせて、何で、ごめんって、言ってくれないの」

それから先は、言葉にならなかった。声というよりも、感情が鳴っているかのように、真歩は声にならない声を絞り出していた。大和の大きなてのひらが、つむじの部分をあたためてくれている。

「おれ、早坂くんとの写真ほしい。ちゃんと笑ってるヤツ。大和さん、撮ってよね」

ぴちやぴちやと足で海水を弄ぶハヤシに、おう、と大和は頷いた。だけど今日は無理かな、とちよつと笑いながら。

「おれとのツーショット、文集に載つけてね」

6 ハヤシの声を丸めた背中で受け止めながら、真歩はもう一粒も涙が海に落ちないように、ぎゅつと顔をしかめていた。

(中略)

写真の現像ができた連絡を受け、真歩はハヤシと取りに行こうと思うが、ハヤシはその日学校に来なかった。そこで、ハヤシのかわりに女子の文集委員であるシホちゃんに行くことになる。店へ向かうあいだに、真歩はシホちゃんから、ハヤシが家の事情でもう学校に来ないと聞き、気持ちを整理できないまま店に着いた。

「あと、これもあげる」

大和はそう言って、真歩に数枚の写真を渡した。

あの日、海辺を歩いていた真歩とハヤシの後ろ姿だった。

あのときも今くらいの時間で、今くらいの夕空で、今くらいの温度で、今くらいお腹がすいていた。

「今日な、コイツ来たんだよ。店」

不意に、大和が言った。

「え？」

「学校いいの？ って言ったら、あの高い声で、いいのいいの！ ってさ。よくねえだろーって思ったけど、母ちゃんと一緒だったしな」

母ちゃんと一緒。罪のない大和の聲が、やわらかくなっていく脳に容赦なく刺さる。

写真の中の真歩とハヤシは、背中を並べて、一歩ずつ歩いている。靴も靴下も脱ぎ捨てて、小さな足の裏を砂の中に埋もれさせながら、二つの背中が遠ざかっていくようにしている。

「写真、できてるなら見せてくれーって騒がれてさ」

あいつ今日もうるさかったな、とぼやきながら、大和は真歩が撮った写真の束を差し出してきた。一枚ずつ、見ていく。どの景色も、あのときレンズを向けたものばかりだ。色、温度、におい、光。一枚ずつ見ていくたびに、頭の中でシャッター音がする。遠くに赤いランドセルがぼつぼつ見える通学路。カシャ。今にも手を繋いで混ざり合おうとしている薄いブルーの雲。カシャ。そして重なるようにして聞こえてくる音。ばふん、ばふん。プルルバッグが足元で跳ねる音。

7 お父さんはいない。どこにも写っていない。そんなこと、ずっと前から分かっていた。

「すげえ嬉しそうに見てたよ、写真。やっぱり早坂くんはすごい、早坂くんの撮る写真はきれいだって」

早坂くん教室で笑わないんだもん。

「だけど写真って、撮る側の人は写ることができないから、」

楽しくなさそうなんだもん。

「おれが笑顔の早坂くんを撮ってあげたかったって」

だから声かけたんだよ。

最後の一枚。

大好きなこの町の景色でもない。きらきらひかる海でもない、あじさいの咲く山でもない。

魔法の料理のようなビーフシチューと、それをおいしそうに食べているハヤシの笑顔。

自分で自分にカメラを向けていたから、レンズがおかしな方向を向いてしまったみたいだ。顔の上半分が切れている。だけど、それでもわかる。それだけでもわかる。ハヤシが笑っていること、雨上がりの晴れた空みたいに見えること。おいしいものを食べて、素直に、心のままに、笑っていること。

早坂くん、もっと笑えばいいのに。笑ってれば楽しくなるよ。

8 「お父さんみたいだ」

え？ シホチャンが隣で呟いた。大和が、何も言わずに真歩の頭の上にてのひらを置いた。つむじのあたりが、ふんわりとあたたかくなった。

「早坂くん？」

シホチャンが心配そうに顔を覗きこんでくる。だけど動けない。

母さんの作ったビーフシチューを食べて、笑う。楽しいことがあれば、笑う。嬉しいことがあれば、笑う。その生き方は、お父さんみたいだ。ハヤシの生き方は、お父さんの生き方、お父さんが家族に望んだ生き方そのものだ。

「お父さん」

孝史さんの言った通りだ。お父さんはこの町に生き続けている。それは、残された僕らがビーフシチューを食べて笑うからだ。楽しいときも嬉しいときも、時には悲しいときにだって笑うからだ。そういうふう生きていくからだ。お父さんはそういう人だった。病室でもいつも笑っている人だった。

「大和さん」

真歩はその写真を見つめたまま言った。

「これからも、カメラのこといろいろ教えてください」

大和は、おう、と頷いた。真歩のつむじにてのひらを乗せたまま、教えてやるよ、と呟いた。  
「僕、写真好きです。好きなんです」

口の周りをシチューで汚して、ハヤシは笑っている。この写真、文集に使おう、と真歩は思った。小さく切り取ってしまってもいいから、どんなに隅っこでもいいから。

(朝井リョウ『星やどりの声』)

㊦ 被写体⇨写真に写し取られる対象。 表面張力⇨液体の表面に働く、液体がこぼれ落ちようとするのを押しとどめる力。  
孝史さん⇨真歩の義理の兄。

問一 ——線部1「写真の話になると、大和は早口になった」とあるが、これは「大和」のどのような様子をいったものか。  
次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 小学生を相手にまじめに専門用語を使って写真の話をしている自分が、何となく照れくさく感じられている様子。
- イ 相手が小学生であっても、写真を撮るプロとしての得意な気持ちと思わず口調の変化に表れてしまっている様子。
- ウ 写真を撮ることが本当に好きで、写真の話になると自分でも気づかないうちに夢中になってしゃべっている様子。
- エ ふだんは写真の話などしない小学生が相手なので、専門的なことをどう話してよいかかわからずあわてている様子。

問二 ——線部2「真歩は自分の親指のつめに乗っている小さな砂を見ながら言った」とあるが、この時の「真歩」の気持ちほどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一方的にハヤシが話しかけてきたり、自分を巻きこんで何かをしたりするのを、内心では嫌だと感じている。
- イ 仲がいいわけではないと言いつつハヤシと一緒にいることを不思議に思いながらも、心地良くも感じている。
- ウ ハヤシと一緒にいるようになったいきさつなど、特に言うほどのことではないと思いい、別の事に気を取られている。
- エ ハヤシとどんなに仲よくなっても、またすぐに別れなければならないので、ふとさびしさを感じている。

問三 ——線部3「あんなふうには、家族皆が泣いている姿、僕、もう二度と見たくない」とあるが、このように言う「真歩」の思いを説明したものとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父のことを思うと、どうしても家族のひどく泣き悲しんでいた姿が思い出されてしまうので、父にはもう会いたくないし、父のことは考えたくないと思っている。
- イ 父の死は悲しいし、父が生きていてくれたらとは思いますが、その一方で自分や家族をひどく悲しませた父に対する強いにくしみが真歩の心の中には残っている。
- ウ 自分より人を思いやる気持ちの強い真歩には、父の死に際しても、自分の悲しみの感情よりも家族がひどく悲しむ姿を目にする方がずっと悲しいことだった。

- エ まだ幼かった真歩にとっては、父が急にそばからいなくなったということが父の死の実感であり、その時の家族がひどく悲しむ姿が強く心に残っている。

問四 ——線部4「大和はもうシャッターを——真歩のことを追い抜かさない」とあるが、このような行動から、二人のどのような思いが感じられるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 真歩の予想外の告白におどろき、なぐさめの言葉をかけることもできずに困っている。
- イ つらい思いを言葉にしている真歩を、静かにそっと受け止めてやろうと気を配っている。
- ウ 自分たちの不用意な言葉が、真歩を悲しい気持ちにさせてしまったことをくやんでいる。
- エ それまでの楽しいムードが、一転して暗いものへと変わってしまったって落ちこんでいる。

問五 ——線部5「その声はまるで、感情の産声のようだった」とあるが、どういうことを表現したものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア その時の真歩の声が、生まれたばかりの赤ちゃんの泣き声のように、いかにも悲しげな声であったこと。
- イ それまでたんとんと語ってきた真歩だったが、その時の真歩の声には、初めて感情がこもっていたこと。
- ウ その時の真歩の声が、うそやかぎりの全くない純粋な気持ちを表したものとしてみんなの耳に届いたこと。
- エ その時の真歩の声は、ずっとしまっていた本当の気持ちがあはれ初めて言葉となって表に出たものであったこと。

問六 ——線部6「真歩はもう一粒も涙が海に落ちないように、ぎゅっと顔をしかめていた」とあるが、この時の「真歩」の気持ちはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ハヤシや大和が自分の気持ちをやさしく受け止めてくれているのが嬉しく、二人の思いにこたえるためにもう泣くまいと思っっている。

イ 自分のつらい思いにどこかまわらず、二人で盛り上がっているハヤシと大和の態度に腹立ちを覚え、早く涙を止めようと思っっている。

ウ 仲がいいわけでもないハヤシなどに思わず自分の弱い心を見せてしまったことをくやみ、無理にでも涙を止めようがんばっている。

エ ハヤシと大和の明るさに、自分一人だけがうじうじと暗い気持ちでいることがはずかしくなり、もう泣くのはよそうとしている。

問七 ——線部7「お父さんはいない。( )ずっと前から分かっていた」とあるが、「お父さんはいない。どこにも写っていない」と「分かって」いながら、「真歩」が写真を撮り続けたのはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大好きな町や海や山の景色を写しつづけることで、いまは天国にいる父にいつか振り向いてもらえる気がしたから。

イ 父が写るはずはないと分かっているが、写真の他に父のいないさびしさをうめ、心の支えとなるものがなかったから。

ウ 学校では友達もできなかつたので、写真の世界に夢中になることで、そのさびしさをまぎらわそうとしていたから。

エ 笑顔を作ることの下手な自分が、周囲とうまくやっていたためには、写真という特技を生かすしかないと考えたから。

問八 ——線部8「お父さんみたいだ」とあるが、誰が、どのような点で「お父さんみたいだ」というのか。四〇字以上、五〇字以内で説明しなさい。

問九 ——線部9「僕、写真好きです。好きなんです」とあるが、この言葉には「真歩」のどのような気持ちが表れているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア いままで父のいないさびしさに耐えてきたが、写真の面白さを教えてくれる大和に父の姿を重ね合わせ、もっと仲良くなりたいと思っっている。

イ 笑わない自分に声をかけてくれたハヤシに感謝し、写真を撮り続けることでハヤシと過ごした楽しい時を忘れずに大切にしていきたいと思っっている。

ウ 写真を通してハヤシや大和と出会えたことから、写真のすばらしさに気づき、これからも写真を通して多くの人と出会いたいと思っっている。

エ 亡くなった父とのつながりを求めて写真を撮るのではなく、それとは切りはなして純粋に写真を撮ること自体が好きなのだと思っっている。

問十 ——線部10「この写真( )どんなに隅っこでもいいから」とあるが、ここから「真歩」のどのような気持ちが読み取れるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ハヤシの生き方を最もよく表している笑顔の写真こそ、自分に声をかけてくれたハヤシのたった一つの思い出として残すのにふさわしいという気持ち。

イ 転校ばかりしていて友達と長くつき合うことのできないハヤシが気の毒に思え、せめて自分だけはいつまでも忘れずに友達であり続けようという気持ち。

ウ これからは素直に笑って楽しく生きていくような生き方をしたいかと思っ、そのことに気づかせてくれたハヤシとのつながりを大事にしたいという気持ち。

エ 真歩やクラスメイトたちに笑顔の大切さを教えてくれたハヤシの写真は、卒業までいなくてもクラスの一員として文集に載せるのにふさわしいという気持ち。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

バラエティ番組などでよく聞かれる「噛む」という言葉があります。これはツッコミ側の言葉で、舌がもつれてうまくセリフが言えなかったことを指摘して、笑いを起こすことです。「いま、噛んだやないか！」という具合に使います。

この「噛む」を指摘するようなことに見られる、ややサディスティックな感覚を一般の人たちも日常的によく使っています。

しかし、私にはそれを指摘しているときの彼らの「他罰的」な気分がとても気になってしまいます。相手を傷つけようというほどではないにせよ、先に攻撃することによって自分にフリ掛からないように防衛しているという心持ちが、端から見ていて気持ちが悪いのです。

政治家や力士など目立つ存在に対して、ネット上の匿名性のなかでおとしめたり、過剰に攻撃したりするフウチョウもありません。「失敗していない多数側」に自分がいることで安心感を得ているというわけです。(中略)

ツッコミは相手に対するひとつの愛情の表現でもあるでしょう。その場の会話のイニシアチブを取るための便利な言葉でもあります。「噛んだ！」といったツッコミは、人を制するために使うと大変便利だったりもします。

ツッコミはコミュニケーションの新しい道具です。自分と他人の会話を編集する技術。人間関係を制御するオペレーションシステムでもあるのです。

私は、仕事で一回り以上違うような若い女の子と話すことがあります。年齢も性別もまったく違う。そういうとき、私が話す「内容」にはほとんど反応しないのに、私が「噛む」と「あ、いま噛みましたね！」などと嬉々として反応する。受け止めきれないもの、理解できないものに対しては反応しないし、反応しようとも思っていない。でも、私が噛むことに対してだけはツッコミを通じて反応する。彼女が理解できる窓口、コミュニケーションの糸口はこうしたわかりやすいボケ(＝失敗)だけなのかもしれません。

ちょっとしたミスに対して、ツッコミを通してコミュニケーションを取るのには最近の傾向だと言えるでしょう。友達が変な格好で現れた場合、「なんだよ、その服！」などというツッコミを入れることでコミュニケーションを取ろうとするので

す。

ツッコミというコミュニケーションは「加工」です。

私は「額縁を当てる」という言葉をよく使いますが、コミュニケーションの中にツッコミを挟むことで、会話が編集されたもの、加工されたものになります。

会話の中にツッコミが入ることによって、「ここが面白い」というマークがひかれ、「ここは笑うところですよ」という額縁が当てられる。「ここに注目してください」という編集がなされて、笑いになります。そうすることによって会話が笑いという形にパッケージ化されていく。これはお笑い芸人だけではなく、今や世の中の多くの人が身につけているスキルなのです。

今の人は、日常会話の中で「そこはツッコまない」という言い方もします。なんと高度なセリフでしょう！ これはどういうことかというところ、加工されたコミュニケーションを先回りして想像し、欠けている部分を指摘しているのです。(中略)

誰もがツッコミのスキルを搭載している以上、常に誰もがツッコミの標的になる可能性があります。絶対に安全なリョウイキはありません。

ツッコミを入れられたくない。ツッコミを入れられたときの自分の打たれ弱さを隠すために、あえて自分からツッコミをすることも多いと思います。自意識を守るためのツッコミです。

弱さを隠すために、過剰防衛になってしまう。ケンカナれしていない人が、過剰に人を殴り続けてしまうのと同じような感じですか。そうやって集団でツッコミをアビせて、炎上させてしまう。

ツッコミはコミュニケーションツールでありつつ、他罰的な性格を持つ、他者を攻撃するためのものにも容易になり得てしまうのです。

安易に比較はできませんが、たとえば「いじめ」の構図を考えたとき、いじめっ子側にまわるのは「自分を守るため」であり、「いじめられる側にまわらないため」という人がほとんどだと思います。そのとき、いじめる側にまわった子どもたちは、いじめられている人間に自分の姿を見ているのです。あれは自分のことだ、と。

お笑い芸人たちは、自分自身が弱い存在であることを認識し、道化にならなければいけないということを自覚しています。

その上で、他人にツッコミを入れたり、ボケにまわってツッコミを受けたりしています。

しかし、お笑いの上澄み<sup>D</sup>だけをすくい、人を罰<sup>ばつ</sup>するための道具としてツッコミを使ってしまったっている人も少なくありません。しかし、お笑いをやっている私からすると、「あなたが持っている剣<sup>けん</sup>は、あなたが思っている以上に重いよ」と思わ

けです。<sup>5</sup>「ヨロヨロしてるぞ、危ないから振り回すなよ」と。

お笑いの都合のいい部分だけを引っ張り出して振り回している。それは、みつともないからやめたほうがいいと思うので

す。

(榎田雄司「一億総ツッコミ時代」)

⑨ サテイステイックな感覚⇨相手に苦痛を与えて喜ぶ感覚。 匿名性⇨誰であるかを明らかにせず、集団の中にまぎれている状況。

イニシアチブ⇨主導権。

オペレーションシステム⇨コンピューターなどに用いられる、全体を効率よく総合的に動かすための基本となる仕組み。OSと略される

ことが多い。

パッケージ化⇨中身を選別して包むこと。 スキル⇨技術。

自意識⇨自分自身がどうであるか、どう思われているかについての意識。 ツール⇨道具。

問一 〰〰線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〰〰線部 A・B の意味として適当なものを次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 「二回り」

ア 六歳 イ 十歳 ウ 十二歳 エ 二十歳

B 「糸口」

ア きっかけ イ 道具 ウ 口実 エ つなぎ目

問三 〰〰線部 C 「搭載している」・D 「上澄み」のここでの意味とほぼ同じ意味になっている表現を文中から探し、それぞれ七字でぬき出しなさい。ただし、「搭載」・「上澄み」の本来の意味は次のようなものである。

搭載 … 機器などに部品や機能を組みこむこと。

上澄み … 液体の不純物が底に沈んで、上方にできる澄んだ部分。

問四 〰〰線部 1 「ツッコミは相手に対するひとつの愛情の表現でもあるでしょう」とあるが、「ツッコミ」が「愛情の表現」といえるのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ツッコミ」は、相手とコミュニケーションがとれていないことを示そうとしたり、変な言動をとった人の誤りを指摘してその人を成長させようとする気持ちを表現したりすることがあるから。

イ 「ツッコミ」は、相手が話している内容を理解しようとする意志や、変な言動をとった人でもその場の輪の中に受け入れようとする気持ちを表現することがあるから。

ウ 「ツッコミ」は、相手に自分が好意を持っていることを示そうとしたり、変な言動をとった人を排除することその場のみんなの一体感を高めようとする気持ちを表現したりすることがあるから。

エ 「ツッコミ」は、相手とコミュニケーションをとろうとする意志や、変な言動をとった人でも排除せずその場の輪の中にむかえ入れようとする気持ちを表現することがあるから。

問五 〰〰線部 2 「額縁を当てる」とあるが、ここではどういう意味か。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 会話の中の面白い点が分かりやすくなるよう強調することで、一つの笑い話としてのまとまりをつける。

イ 相手の言葉の大事なところを言い直して強調することで、重要な点を分かりやすくしようとしている。

ウ 会話にひと区切り入れて話の終わりを強調することで、これから新しい話が始まることに注意をうながす。

エ 相手の言葉のまちがっている点を指摘することで、聞いている人が正しい知識を得られるように導く。

問六 —— 線部3 「加工されたコミュニケーションを（ ）指摘しているのです」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰かがツッコミを入れたら笑いにつながるはずのやりとりを、実際の会話の前に想像し、それに反して入らなかったツッコミのことを取り出して示している。

イ 自分が適切なツッコミを入れたら笑いがおきるはずのやりとりを、実際の会話の前に想像し、それに反して実際には不十分だったツッコミについて言い訳している。

ウ 誰かが適切なツッコミを入れたら笑いがおきるはずのやりとりを、実際の会話の前に想像し、それに反して不十分だったツッコミのことを取り出して示している。

エ 自分がツッコミを入れたら笑いにつながるはずのやりとりを、実際の会話の前に想像し、それに反して入れそこなつたツッコミについて言い訳している。

問七 —— 線部4 「そのとき、いじめる側にまわった子どもたちは（ ）あれは自分のことだ、と」とあるが、ここで「いじめる側」が「いじめられている」対象の中に見ている「自分の姿」とはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア これまでのいじめられた経験を思い起こし、今いじめられている人間に重ね合わせている、かつての思い出したくない自分の姿。

イ いじめられている人間の反応をよく見ることでかえって自覚させられずにはいられない、いじめているみにくい自分の姿。

ウ いじめる側にまわらなかつたら自分もそうになっていたかもしれないと考える、想像の中のいじめられているみじめな自分の姿。

エ 今はいじめる側にいたとしても、いつかきっと自分もいじめられる側にまわるだろうと先回りしてあきらめている自分の姿。

問八 —— 線部5 「ヨロヨロしてるぞ、危ないから振り回すなよ」とあるが、「一般の人」の使うツッコミはどのような点で「危ない」と言っているのか。四〇字以上、五〇字以内で説明しなさい。ただし、次の二つの言葉を必ず用いること。

傷            コントロール

問九 落ち度のある相手に対して、インターネット上で「炎上」に至るまで非難が集中したり、土下座を強要してまで相手をおとしめようとしたりする、現代のツッコミ意識の高まりには、人々のどのような気持が反映されていると考えられるか。本文全体の内容にもとづいて、解答らんに合うように五〇字以上、七〇字以内で答えなさい。ただし、次の二つの言葉を必ず用いること。

攻撃            安心感



